

トラークル研究

第二号

(トラークル協会創設 10 周年記念特集号)

2005 年 10 月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

Tel/Fax 047-360-9308

トラークルの詩における所属性の非呈示とその意味及び効果

三枝 紘一

序

トラークルの詩の特徴ある表現方法の一つに、ある現象の所属を呈示せずそのまま示す例が見られる。たとえば色彩語を例にとれば、「青い空 (blauer Himmel)」を名詞化された「青 (Blau)」で示す。更にこの名詞化された色彩語が独立 (自立) 化する傾向が見られる。この所属を直接示さない表現は色彩語のみならず、人間の身体的部位を示す場合にも見られる。例えば「私の眼 (mein Auge)」とせず、ただ「眼 (Auge)」(この場合無冠詞か、あるいは定冠詞または不定冠詞が冠せられる) という場合が多い。もちろんそれらはコンテキストから詩的自我 (das lyrische Ich) あるいは詩の主人公 (例えばカスパー・ハウザー、エーリス等) の、また他の何らかの人物の身体的部位であることが分かる場合が多いのであるが、しかしそれらが更にはいずれかの人物を離脱し、名詞化された色彩語と同じように独立 (自立) 化する傾向がある。また人間の行動も動詞で示さず、例えば「誰々は流離った (----- wanderten)」という言い方ではなく「流離い(Wanderschaft)」と言うように名詞で示す例が見られる。したがって結果的にその行為の主体を示さないことになり、これも所属性の非呈示の範疇に入ると言うことができるだろう。中には全くその所属が特定あるいは想定できない独立 (自立) 化した色彩や身体的部位や行動が見られる。更にトラークルの詩の特徴的表現として形容詞の中性名詞化があるが、これも所属性の非呈示という観点から考察できる。

先ずこれらの実例を挙げ、個々についてコメントを加えながら、整理し、最後にそうした表現が詩においてどのような効果をもたらすかを考察する。

(1) 名詞化された色彩語

トラークルの詩における名詞化された色彩語は多い。その中でも最も多いのは、やはり「青 (Blau, Bläue)」である。ちなみに形容詞では「黒い (schwarz)」が最も多く、次に多いのが「青い (blau)」である。校訂版全集 (Historisch-kritische Ausgabe=HKA) の第一巻では、Blau が 20、Bläue が 26 あり、都合 46 例の多きにのぼる。次に多いのは、それぞれ 23 例ある Gold と Grün である。その他多い順に列挙すると、赤色系が 10 (Rot が 5、Röte が 5)、Grau が 6、Schwärze が 3、Purpur が 3 となる。

先ず Blau (Bläue) であるが、やはり空の青を指す場合が多い。

・・・ Die Wolken stehen

Im klaren Blau, die weißen, zarten. 『Musik in Mirabel』 HKA I S.18

この場合コンテキストから明らかに「澄んだ青(klaren Blau)」は空の青を指している。このような用法は既に他の詩人の作品にも見られる。Und schöne weiße Wolken zieh'n dahin / Durchs tiefe Blau, wie schöne stille Träume ; — Hermann Allmers 『Feldeinsamkeit』 1)

Flimmernd schwankt am offenen Fenster
Weinlaub wirr ins Blau gewunden,
Driinnen nisten Angstgespenster. 『Der Gewitterabend』 HKAI S.27

上の例の場合もそのような明確な空を示す表象はないが、空の青と見てよいだろう。

Du aber gehst mit weichen Schritten in die Nacht,
Die voll purpurner Trauben hängt
Und du regst die Arme schöner im Blau. 『An den Knaben Elis』 HKAI S.26, 38

・ ・ ・ Mägde gehen
Durch feuchte Bläue und bisweilen sehn
Aus Augen sie, erfüllt von Nachtgeläuten. 『Ein Herbstabend』 HKAI S.61

Ein reines Blau tritt aus verfallener Hülle ; 『Der Herbst des Einsamen』 HKAI S.109

Geduldige Stille odmen die Föhren,
Die schwarzen Lämmer am Abgrund,
Wo plötzlich die Bläue
Seltsam verstummt, 『Das Gewitter』 HKAI S.157

これらの諸例の場合、詩人が何物かの **Blau** を想定して呈示したとしても読者はその色彩の属する対象を表象することは難しい。ただ **Blau** は **Blau** として表象せざるをえない。つまり抽象絵画におけるような対象に属さない色彩と同じように思い描かざるをえない。

次に多い「金色 (Gold)」は、色彩そのものの他に金属の金を示す場合がある。

O, das gräßliche Lachen des Golds. 『An die Verstummten』 HKAI S.124

この詩行の **Gold** は金貨に代表される財貨であって富一般と言ってもよく、これは明らかにネガティブにとられている。しかしこのような象徴性を帯びながら **Lachen** という音響を伴う現

象を示す語との結合によって金属という属性を失っていない。

しかし他の場合は、Goldはおおむね色彩を示しポジティブな色価を有している。

Verflossen ist das Gold der Tage,

Des Abends braun und blaue Farben: 『Rondel』 HKAI S.21

このような場合は同時にその Gold が何のそれであるかを想定することは比較的容易である。

Tief in Blau und Gold versponnen

Traumhaft hasten sanfte Nonnen 『Die schöne Stadt』 HKAI S.23

・ ・ ・ , es suchen Schatten dort

Am Hügel das tönende Gold 『Vorhölle』 HKAI S.132

O dunkle Angst

Des Todes, so das Gold

In grauer Wolke starb. 『Das Herz』 HKAI S.154

これらの Gold は金色に見える日の光であろう。

Das Gold tropft von den Büschen trüb und matt. 『Trübsinn』 HKAI S.53

ここでは Gold は金色に染まった露の雫であろう。

Grün は何のそれであるか類推できるのがほとんどである。これは一般に使用されている草木の緑を示す用例が多数を占める。

Vorm Fenster tönendes Grün und Rot. 『Die Bauern』 HKAI S.33

Abend und die dunklen Düfte des Grüns 『Abend in Lans』 HKAI S.93

Also rührt ein spärliche Grün das Knie des Fremdlings. 『Am Mönchesberg』 HKAI S.94

Rot(Röte)も推定できる例が多い。

Vorm Fenster tönendes Grün und Rot. 『Die Bauern』 HKAI S.33

Und ein Kanal speit plötzlich feistes Blut

Vom Schlachthaus in den stillen Fluß hinunter.

Die Föhne färben Stauden bunter

Und langsam kriecht die Röte durch die Flut. 『Vorstadt im Föhn』 HKAI S.51

前者の Rot は赤い花のそれであり、後者の Röte はもちろん一行目の Blut のそれであろう。しかし分かりにくい例もある。

Im Dunkel der Kastanien lacht ein Rot. 『Die Verfluchten』 HKAI S.103

ちなみにこの表現は、Rot wie Blut und braun wie alter Wein lacht aus den Zweigen / sein Mund in totem Übermut 『Faunskopf』 2) の影響が考えられているが、ランボーの場合は、赤いのは「彼の口」の赤さであることは明白である。しかし ein Rot は赤褐色のカスターニエ（マロニエ）の実の蓋然性が高いと思われる。

Und sie starrt von Schmerz geschüttelt.

Röte träufelt durch das Dunkel. 『Die junge Magd』 HKAI S.13

これも分かり難いが、Schmerz からすると血の赤の可能性が強い。

次に Grau の例を挙げる。

Ein Schober flieht durchs Grau vergilbt und schief 『Der Spaziergang』 HKAI S.44

Im Grau, erfüllt von Täuschung und Geläuten. 『Dämmerung』 HKAI S.48

いずれも明確ではない。これらに限らず Grau は一般に曖昧である。しかし暗い、冬枯れの曇った日の、あるいは夕暮れの色調とすることは可能である。

Schwärze の例を挙げる。

Gebirge : Schwärze, Schweigen und Schnee. 『Geburt』 HKAI S.115

この場合 Sch の頭韻の趣向がたち勝っているが、Schwärze は高山の風景を構成する代表的な

三種の特徴のひとつをなしていることは明らかである。

最後に **Purpur** であるがいずれも所属は明らかである。

Der Purpur ihrer zerbrochenen Münder 『<Nähe des Todes>』 HKAI S.368

この場合は、**Purpur** はもちろん打ち砕かれた口の色を示している。

Da aus des Einsamen knöchernen Händen

Der Purpur seiner verzückten Tage hinsinkt. 『Nähe des Todes』 HKAI S.57

この場合は抽象的、象徴的であるが、ポジティブな色価を有し、所属が明示されている。

トラークルの名詞化された色彩語の多くは、何らかの対象の色彩を指示する場合が比較的多い。しかしそれは色彩によって異なる傾向が見られる。以上見てきたように **Gold** や **Rot(Röte)** 等は、その所属を想定することが比較的容易であり、**Grün** や **Purpur** はほとんどその所属性が分かる。これに対して最も多数を占める **Blau** はその所属が明確に決定できない場合が多い。したがってそこに **Blau** を象徴的にとる余地が生ずるのである。

しかしいずれにせよ所属性が明らかであれ、不明確であれ色彩そのもので呈示されるため対象が捨象され、それは純粋か、純粋に近い色として読者には受け取られる。特に対象から自由になったスカラにある色彩の働きは、抽象画におけるそれに近似していると言える。しかし同じではない。抽象画における色彩は、その色調やその色彩の及ぶ範囲は見る者に直接示される。これに対して詩においては、その色彩の対象が特定あるいは想定できない場合、すなわち自立化した色彩は、純粋な色として読者に表象され、またその色彩の範囲は限定されない。この二点で抽象画の色彩と詩における対象を直接示さない色彩と異なる。

トラークルの詩における名詞化された色彩語の多用は、その色彩の所属する対象を明示しないことによって暗示性を高めると同時に詩にある意味で曖昧性をもたらしたが、純粋な色彩として表象される結果、敷衍的に言って詩の純粋化に与っていることは明らかである。

この名詞化された色彩語が象徴化されているか否かの問題であるが、**Gold** のように象徴化されやすい色彩語は、トラークルの場合も象徴的に働いている例が多いが、しかしその多くは象徴化されて使用されてはいないと言えるだろう。というのはそれらが——これがトラークルの詩の特徴の一つであるが——主に具象性に富む文脈の中で使用されており、したがってその場合その色彩の感覚性が直接訴えかけてくるからである。シュナイダー(**Schneider**)は、名詞化された色彩語のある詩行を列挙して、色彩の自立は「事物に関わるもの(**Dingbezug**)」から「自我に関わるもの(**Ichbezug**)」への変化ととり、それは象徴化しているとしているが³⁾、その色彩語の大半はその域に達してはいないのではないか。やはりそれぞれの色彩語の固有な質とそれがいかなる文脈の中におかれているかによって左右されるのである。翻っていえば、トラークルは各々の色彩語の特性をよく見極めていて、その特性を生かした使用をなしているという

ことが逆に言えるだろう。

もちろんシュナイダーは、トラークルの名詞化された色彩語は象徴的であるが、リアルな質を内に蔵していると指摘しているが④、そのリアルな質、言葉を換えれば感覚性と純粹性を二つながら同時に併せ持っていることがトラークルの名詞化された色彩語の特徴また特長と言えないだろうか。

次にトラークルのこの名詞化された色彩語は印象主義の用法であるか、否かの問題であるが、印象主義の用法に始まっているみなすことができるだろう。色彩は音響と並んで最も感覚に直接訴えてくるものであるから、印象主義の手法は当然それらを前面に打ち出す。色彩に限って言えば、それが属する対象よりも優先的に取り上げられることになる。しかしトラークルの場合次第に印象主義のカテゴリーを蟬脱したような使用法、すなわち自立化した色彩が顕著になる。

2. 身体的部位

初期の作品においては、おおむねその身体的部位の所有者が示される。

・ ・ ・ Dumpfe Fieberglut

Läßt giftige Blumen blühen aus meinem Mund, 『Das Grauen』 HKA I S.220

Und ihre Lippen kundig aller Künste

An meiner trunknen Kehle wütend schwellen. 『Sabbath』 HKA I S.222

しかし次第に身体的部位に所有冠詞が冠せられなくなり、その代わり定冠詞が多く冠せられるようになる。もちろんその身体的部位の持ち主は前後関係から判断できる場合が多く、またその多くは詩的自我あるいはその他の人物の身体的部位ととられうる。

この身体的部位の持ち主の非呈示、特に詩的自我のそれは、親友エルハルト・ブッシュベック宛の書簡の言「最初の草稿の限られて私的な形式や様式よりもこの普遍的なそのほうがより多くのことを君に語りかけ告げるだろうと私は確信している。HKA I S.485」が一つの根拠になるであろう。詩における私的環境からの離脱にはやはり第一に考えられるのは人称を示す品詞の非呈示であるからである。

そしてその帰属性が曖昧になり、更にはそれが独立的に詩において働くようになる。

Silbern flimmern müde Lider

Durch die Blumen an den Fenstern. 『Die schöne Stadt』 HKA I S.24

この Lieder は人間のそれであることは間違いないのであるが、誰のそれであるのかは明示されていない。この詩節には、その持ち主は登場していない。前の詩節には schöner Damen と junge Mütter とが登場しているが、これらとは関係していないとみるのが順当であろう。というのはこの詩は「美しい町」ザルツブルクの様々な印象を道路ムービー的に、点描的（印象主義の技法の意ではなく）に綴った作品で、次々に現れるイメージはそれぞれ孤立しており相互に関連がないからである。とにかく「臉」だけがクローズアップされ、その人物は捨象されている。その他の同じような例を挙げると、

Langsam beugt die heiße Stirne

Sich den weißen Sternen zu. 『In einem verlassenen Zimmer』 HKAI S.25

Wieder nachtet die Stirne in mondenem Gestirn ; 『Ruh und Schweigen』 HKAI S.113

O Mund! der durch die Silberweide bebt. 『Heiterer Frühling』 HKAI S.50

Daß von feurigen Lidern

Tau ins starre Gras tropft —

Unaufhaltsam! 『Die Heimkehr』 HKAI S.162

Purpurn brachen Mund und Lüge

In verfallener Kammer kühl ; 『Nachtergebung』 HKAI S.164

次第に身体的部位に不定冠詞が冠せられるようになる。

Wenn es Abend wird,

Verläßt dich ein blaues Antlitz. 『Verklärung』 HKAI S.120

Stille leuchtet die Kerze

Im dunklen Zimmer

Eine silberne Hand

Löschte sie aus, 『Sommer』 HKAI S.136

Im Hasellaub wölbt ein purpurner Mund, 『Jahr』 HKAI S.138

Stürmt den Himmel

Ein versteinertes Haupt. 『Die Nacht』 HKAI S.160

定冠詞ではなく不定冠詞が冠せられた場合、それは明らかに詩的自我のそれではなく、また他の人物のそれであるというより、むしろそれは主体から切り離され、否、それ自体が主体として現前し、より物象感が生じる。

しかし雑誌ブレンナーに発表された後期の詩には、Haupt に dieses(dies)が冠せられた例が見られ一つの特徴をなしている。

Magnetische Kühle

Umschwebt dies stolze Haupt, 『Das Gewitter』 HKAI S.158

Schlaf und Tod, die düstern Adler

Umrauschen nachklang dieses Haupt : 『Klage』 HKAI S.167

この dies(es)は一種の強調、あるいは強意を込めた表現と見られ、また明らかに詩的自我の頭であろう。そしてこれは力強い詩風に相応しい表現と言える。

次に身体的部位が擬人化された表現、すなわちそれが持ち主を離れ、みずから行動を示す例が見られる。特に Ohr が顕著である。

Das Ohr hört nachts Sonatenklänge. 『Musik im Mirabel』 HKAI S.18

Das Ohr folgt lange den Pfaden der Sterne im Eis. 『Winternacht』 HKAI S.128

・・・ und das Ohr folgt immer dem rasenden Schrei des Geistes. 『Traum und Umnachtung』 HKAI S.150

Sonaten lauscht ein wohlgeneigtes Ohr ; 『Unterwegs』 HKAI S.295

こうした表現は Ohr の他に Auge にも見られる。

Aus Fenstern leere Augen sehen. 『Im Weinland』 HKAI S.274

Feurige Engel, die aus verstorbenen Augen treten. HKAI S.303

しかしこのような表現は既に他の詩人の作品にも見える。Die gesprächsmüden Lippen

schweigen, (C.F.Meyer 『Das Ende des Festes』)⁵⁾, Und runde Augen sahen uns traurig an(Georg Heym 『Die Städte』) 後者の場合、真ん丸い眼を持つ者は都会の通りすがりの人間である。したがって人間そのものは詩的主体にとって関わりがなく、その眼の表情のみが詩的主体の心を捉え、その人間は捨象されたのであろう。都会の匿名性を如実に示した表現といえる。

こうした表現、例えば *Aus Fenstern leere Augen sehen.* と *Aus Fenstern sieht man mit den leeren Augen.* とを比較した場合、前者は人間が背景に退き、その代わり *Augen* がクローズアップされる。物が剥き出しに呈示されることによって具体性と感覚性が強められる効果を生み出す。それは更に散文の持ち前の叙述性を排し、ひいてはポエジー性を高めることになる。

Die Nacht ist über der zerwühlte Stirne aufgegangen

Mit schönen Sternen

Am Hügel, da du von Schmerz versteinert lagst. 『<Nächtliche Klage> 第一稿』HKA I S.328

Über dem schmerzversteinerten Antlitz 『Nächtliche Klage 第二稿』HKA I S.329

後者は、前者を単に簡約化したにとどまらず、*du* を消去すると同時に、その代わりに *Antlitz* という具体的な身体的部位を持ち出すことによって具象性が高められた。その *Antlitz* が誰のであるかは曖昧化されたが、むしろ詩人はそれを等外化しているように見える。いずれにせよここに意図的に身体的部位の独立化を配慮しているのが明らかに読み取れる。

トラークルの詩は、一方では暗示性に富んでいると同時に具体性と感覚性に富んでいるのは、一部にはこうした用法によるものと言える。またこの表現は簡縮化、あるいは凝縮化表現と言える。詩の本来の意味である *diichten* にそった表現であり、これは散文的要素をできるだけ排除してポエジー性を高めようとする意図のもとに行われたと考えられる。この見方を敷衍すれば色彩の名詞化と同じように詩の純粹化の一環をなしていると言えるだろう。

3. 身体的行動

人間の身体的行動も、その人間を離れ自立化する傾向が見られる。

Wanderschaft durch dämmernden Sommer

An Bündeln vergilbten Kornes vorbei. Unter getünchten Bogen

Wo die Schwalbe aus und ein flog, tranken wir feurigen Wein. 『Abend in Lans』HKA I S.93

ここではまだ人間の行動 *Wanderschaft* は誰のそれであるかは想定できる。それは *wir* のそれである。しかし普通ならば *wir wanderten* というところを *Wanderschaft* で示している。このような主語同士で表現するところを定冠詞や所有冠詞を冠せず、人間の行動を名詞のみで表す傾向は後期に多く見られる。

Friedlose Wanderschaft durch wildes Gestein ferne den Abendweilern, heimkehrenden Herden ; 『*Offenbarung und Untergang*』 HKA I S.169

ここでは「流離」は誰がするのか明示されていないが、詩的主体のそれととることができる。

Frost, Rauch, ein Schritt im leeren Hain. 『*Im Winter*』 HKA I S:39

*Am Abend : Schritte gehen durch schwarzes Land
Erscheinender in roter Buchen Schweigen* 『*Verwandlung*』 HKA I S.41

これらの *Schritt(e)* は誰のそれであるか明示されていない。これらは詩の主体のそれととることは難しい。いずれにせよ、これら人間の行動をその主体と動詞で示さず、行動を表す名詞に変える傾向は主体の曖昧化をもたらすが、同時にこの呈示的表現はやはり散文の説明的表現を排除し、詩の純粹化を目指すものと受け取ることができる。

4. 形容詞の中性名詞化

形容詞の中性名詞化の使用は、トラークルの詩における最も特徴的な表現形式の一つである。

*Unter saugenden Bäumen
Wandert ein Dunkles in Abend und Untergang,
Lauschend der sanften Klage der Amsel.* 『*Siebengesang des Todes*』 HKA I S.126

Schweigend verläßt ein Totes das verfallene Haus. 『*Siebengesang des Todes*』 HKA I S.126

*Silbern weint ein Krankes
Am Abendweiher,* 『*Abendland*』 HKA I S,139

以上の例から分かるようにそれらは生けるもの、おそらくは人間を指し示しているものと考え

られる。それは動詞、あるいは現在分詞の使用 (wandert, lauschend, schweigend, verläßt, weint) から判断できる。ただそれらを ein Dunkler あるいは eine Dunkle、ein Toter あるいは eine Tote、ein Kranker あるいは eine Kranke または他の何らかの男性名詞や女性名詞にして示さず、形容詞の中世名詞化によって示した理由はにわかには詳らかにしはしない。しかしそれは一つには表現世界の拡大に与っているのは確かであろう。更に翻って、詩の純粹化という観点から見ると、既存の男性名詞や女性名詞ではどうしてもすでに世俗性を纏ってしまっているので現世に存在しないものであるがゆえに「純粹」である中性名詞化された名詞で表現したのではないかと思われる。一方さらにこれは『Abendländisches Lied』の語 E i n Geschlecht のヴァリエーションの一つとも考えられうる。E i n Geschlecht は、せんじ詰めれば、男女の性を超越した存在と言うことが出来る。これとその点で中性名詞化された人間存在とは類似性を持つと言える。

形容詞の中性名詞化表現は、本題の所属性の非呈示と直接には関わりがないと言えるが、いずれにせよ、その性をニュートラルにすることによって男性にも女性にも所属しない人間的存在を呈示したという点で所属関係の希薄性を表現したという点で通じるものがあると言える。

おわりに

トラークルの色彩、身体的部位、人間の行動の所属を明示しない方法は、詩における散文的論理性、具体的に言えば例えば説明的表現あるいは叙述的表現に代わる呈示的表現を意図している。それは表現の簡縮化、凝縮化になり、論理性に曖昧さをもたらすが、同時に暗示性が増幅されることになる。それはまた日常の言語が纏ってしまった俗性からの、すなわち日常的関連からの離脱に繋がり、詩を純粹化する効果をもたらしている。また形容詞の中性名詞化も表現の簡縮化、凝縮化表現とは言えないが、人間存在を、同じようにすでに俗性を纏ってしまっている既存の男性名詞、あるいは女性名詞で示さず、中性名詞で呈示することによってこの世に属していない存在の純粹性を表現していると言うことができる。

所属性を敷衍化すれば、所有関係である。所有関係とは現世における世俗性を最も端的に示している関係性と言えるだろう。したがって所有関係の非呈示は、現世からの離脱を願う魂の、ひいては詩人の希求の志向の結果を指し示してはいないだろうか。次の詩行はこのことの根底ある思念と言えるだろう。

Es ist die Seele ein Fremdes auf Erden. 『Frühling der Seele』 HKA I S.141

一方これに対して感覚に直接訴えかけてくるもの、具象的なものを保持しよう、さらには表に出そうということも意図されている。両者を同時に表現しようとする努力が詩人の工房、す

なわちその稿体の変遷を検証すると窺い知ることになる。

この傾向は後期になるにしたがって顕著になる。しかし同時に従来の所属が明らかにされる色彩、身体的部位、人間の行動も、その数は少なくなる傾向にあるが、かなり並存している。これはトラークルの詩の表現の豊かな多様性でもあるのであるが、みずから獲得した新しい詩法に囚われず、効果があれば従来の表現方法を選ぶ詩人の融通性にあると考えられる。

テキスト

1. HKA=Georg Trakl. Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Ergänzte Auflage. Hrsg. von Walther Killy und Hans Szklenar. Bd. I,II. Otto Müller Verlag Salzburg. 1987.
2. IA= Georg Trakl. Sämtliche Werke und Briefwechsel. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg.von Eberhard Saueremann und Hermann Zwerschina. Roter Stern Verlag. Stroemfeld. Bd.II.1995. Bd.III.1998. Bd.IV1. Bd.IV2.2000.

用語索引

Wetzel, Heinz : Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. Otto Müller Verlag Salzburg. 1971.

註

- 1) Allmers, Hermann : Buch der Lyrik. Hrg. von Friedrich Mauer. Franz Cornelsen Verlag. Berlin.1947
- 2) Rimbaud, Arthur : Leben und Dichtung. Übertr. V. K. L. Ammer. Einl. V. Stefan Zweig. Insel Verlag. 1907. S.140.
- 3) Schneider, Karl Ludwig : Der bildhafte Ausdruck in den Dichtungen Georg Heyms, Georg Trakls und Ernst Stadlers. Studien zum lyrischen Sprachstil des deutschen Expressionismus. Carl Winter Universitätsverlag. Heidelberg. 1968. S.130
- 4) Schneider, Karl Ludwig : a.a.O. S.130
- 5) Meyer, Conrad Ferdinand : Sämtliche Gedichte. Verlag Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1978.